

記念講演

後藤新平と拓殖大学―自治三訣によして―

総長・学長 渡辺 利夫

さて、話は尽きません。あれほどの巨大な仕事群を成し遂げた後藤を衝き動かしてきた思想とは何かについて、ここで考えてみなければなりません。

後藤の融通無碍な動きを反映してのことでありましょう、氏の思想は首尾一貫したものは必ずしもありません。時に矛盾もみられるのですが、大きく分けて1つの体系性をもっていると思われまふ。思い切つて単純化すればその体系のエッセンスが、晩年、ボーイスカウトに集り青少年に説きつづけた、「後藤三訣」だといったと思われまふ。本学の学友であれば、誰でも知っているはずの次のフレーズ(④)です。

- ④ 人のおせわにならぬやう人の御世話をするやう
- ⑤ 「もし、国家と国民との関係を、有機体と細胞との関係に比べれば、国家生活の総体は、有機体の機能であり、各種生活体の働きの細胞の働きと同様である。すなわち、各種生活は、国家生活の一部機能であり、国家は生活機能の働きのよって、はじめて国家の働きを全うするのである。したがって、国家の健全な発達をさせようとするならば、国家生活の一部の機能である、各種生活体を健全に発展させねばならない。各種生活体を健全に発展させようとするならば、各種生活体特有の、特殊な目的、特殊な利害、特殊な習慣、特殊な感情に順応した、生活態度、生活作用が行われなければならない。」(後藤新平「後藤新平と如何か―自治―藤原書店、平成21年)

後藤の思想の根幹にあるのは、現代の政治学の用語法でいえば、いわば「国家有機体論」でありまして、「国家契約論」とは対照的なもので、国家と国民を一つの生物のような自然生命体と見立て、その成員であるところの個人、つまり国民はあつたかそれが一つ一つの細胞であるかごとき有機体の構成者だとか考える思想のことだといつていいと思われまふ。個人あるいは市民との法的な契約に

よつて国家が成り立つ、そう考へる国家契約説とはきわだつて対照的な思想です。後藤は大正8年(1919)に出版した「自治生活の精神」(新時代社)という本の中で次(⑤)のよう

家奉仕」の精神だといつています。この三訣は大正14年(1925)の著作「自治三訣―旭世の心得―(安國協會出版部)の中に収められています。もう私の煩わしい解説などではなく、後藤本人の語らせてみましょう。「人のおせわにならぬやう」を後藤は次(⑥)のよう

見ても、この細胞である個人がどこまでも健全であること(1925)の著作「自治三訣―旭世の心得―(安國協會出版部)の中に収められています。もう私の煩わしい解説などではなく、後藤本人の語らせてみましょう。「人のおせわにならぬやう」を後藤は次(⑥)のよう

「身が無數の細胞からでき上がつているように、社会といふ国家といわれる大きな団体も、人間という無數の個人から組織されている。細胞が不健全であれば、その社会が不健全である。自然、社会が健全であるよう希望することをお願いする。自然、社会が健全であるよう希望するならば、個人々々が自治精神の堅実な活力に満ちた者でなければならぬ。この意味から個人として自己を完成して自主独立の人にあらしめねばならぬように、社会国家から



かかねて家財を売却し、母と姉を故郷に残し、慚愧の思いで中津藩を後にして大阪の諸方洪庵の適塾で学び、その後、東京に出て、とうにか幕臣となつた男です。母と姉を東京に呼びもどすために中津に帰つてきた時に、故郷の人々に書き残した書が「中津留別之書」です。その中に次(⑦)のような有名な一文があります。

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「身が無數の細胞からでき上がつているように、社会といふ国家といわれる大きな団体も、人間という無數の個人から組織されている。細胞が不健全であれば、その社会が不健全である。自然、社会が健全であるよう希望することをお願いする。自然、社会が健全であるよう希望するならば、個人々々が自治精神の堅実な活力に満ちた者でなければならぬ。この意味から個人として自己を完成して自主独立の人にあらしめねばならぬように、社会国家から

かかねて家財を売却し、母と姉を故郷に残し、慚愧の思いで中津藩を後にして大阪の諸方洪庵の適塾で学び、その後、東京に出て、とうにか幕臣となつた男です。母と姉を東京に呼びもどすために中津に帰つてきた時に、故郷の人々に書き残した書が「中津留別之書」です。その中に次(⑦)のような有名な一文があります。

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

換言すると個人として磨かれた美しい人格は、社会的生活を営むことによつて、初めてその真価を発揮することのできるものである。自主的自治の個人生活から出る作用であつて社会的に自主生活を営むのが文明人の持前である(後藤新平「後藤新平とは何か―自治―藤原書店、平成21年)

この点は後藤の思想を考えると上で特に重要性をもっていると思はれます。後藤は先に引用しました著作「自治生活の精神」の冒頭で、次(⑧)のよう

「人間には自治の本能がある。……人間は自己の生活を拡充させる権利を持つていゝる。どのようにして自己の生活を拡充せよ向上させるのか。自己は決して自己単独で生存できない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」

「一人は自己の生活に満足せざるを得ない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充せよ向上することが可能である」